

I  
古代から江戸期の三輪

# 一 古代・中世の三輪

## 1 三輪の遺跡

発掘された遺跡は、三輪の近辺で発掘された遺跡は、それほど多くはありませんが、そのいずれもが古い時代の集落の立地を考へた遺跡である上で、興味深い情報を提供してくれま



2つの遺跡の位置関係

▽三輪宮ノ越遺跡 宮ノ越遺跡は、市道やマンションの建設にともなうて、二次にわたって調査が行われました。その結果、第一次の調査では、弥生時代の後期から室町時代初頭にかけての遺物が多量に出土し、この地で継続的に生活が営まれていたことが推測されました。また第二次の調査では、<sup>たてあな</sup>堅穴住居をはじめとする弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡や、中世から近世にかけての溝などの遺構が検出されました。このうち弥生時代後期に属する住居跡からは、<sup>てあぶり</sup>手焙形と呼ばれる特殊な形態の土器がほぼ完全な形で出土し、注目されました。

▽三輪餅田遺跡 餅田遺跡は三輪小学校の施設整備に先だって調査が実施されました。三次にわたる調査では、弥生時代を通じて継続的に営ま



宮ノ越遺跡 (三田市教委提供)

### 遺跡の立地

宮ノ越遺跡は、餅田遺跡の北約二百五十メートルという近接した距離にあり、いずれも三輪の東部から高次への山裾に連なる、段丘面の尾根状地形の上に立地しています。この立地は、谷筋や段丘下の低地面に営まれたであろう水田に対する経営上の利便と、武庫川の水害に煩わされる心配がない適度な標高との両立の結果ではないでしょうか。両遺跡の東側には、弥生時代および古墳時代の集落跡である高次北ノ垣内遺跡も所在しています。これらの遺跡の調査結果から見て、この段丘面は（農村としての）三輪の原点の一つとして位置付けることができるように思われます。

## 2 三輪という地名

和名類聚抄と 平安時代の半ば、十世紀の前半にまとめられた「和名類聚抄」という事典には、当時の地名の一覧が掲載されています。この郷というのは行政上の区画としては現在の村に近いものですが、その範囲は村よりも大きいものと考えられます。

新抄格勅符抄 されています。そのうち摂津国有馬郡の項には春木、播多、羽束、大神、忍壁といった郷の名が載せられています。

れたと思われる集落の跡が見つかり、三輪地区における拠点的な集落の一つであると考えられています。

とりわけ第一次調査では、稲の穂首刈りに用いられる石包丁が未製品を含めて多量に出土し、石包丁の工房の存在を示唆するものとして注目されました。またプールの改築にともなう第三次調査では、焼失した竪穴住居が炭化した状態で検出され、弥生時代の建物の構造を知る上で、貴重な情報が得られました。

これら郡内の五郷のうち、「大神」とあるのが、現在の三輪を含んだ範囲にあたるものと思われるが、他の四郷とは異なり、読み方が示されていません。隣接する河辺郡内の「大神」郷の場合は「おおむわ」と読ませていますので、有馬郡の場合も「おおむわ」または、奈良県の大神神社と同じく「おおむわ」と読まれていたものと思われる。

ところが、この大神の地名は、高山寺本こうざんじほんと呼ばれる別の系統の「和名類聚抄」ではその名がみえません。高山寺本では、ほかにも多くの地名を省略していますが、この本で省略された地名は、一種の分村的な位置付けにあった地名ではないかと考えられています。とすれば三輪の地は、本来は（「大神」の前に書かれている）羽束郷の一部であった可能性もでてきます。それではもしこの推測が正しいとすれば、なぜ羽束郷内に大神という地名が派生したのでしょうか。そのカギを握るのが、平安時代に編纂されたと考えられる「新抄格勅符抄」しんしょうかくちふしょうに見える「天平神護元年（七六五）、撰津国に大和の大神神社の封戸ふくこ二十五戸を置き、のちに五戸を追加した」という記事です。封戸というのは古代における一種の領地のことです。

この記事では封戸の場所が定かではありませんが、有馬郡における大神の地名がこの記事と関係する可能性は、現代の三輪神社の存在とも併せて、極めて高いと考えられます。つまり大神神社の封戸が置かれることによって、羽束郷内に大神という地名が派生したのではないかと考えることができるのです。とすれば現在に受け継がれる「三輪」の地名は文字通り、三輪（大神）の神との関わりの中かで形成されたこととなります。

### 松山と三輪

このように、古代において正式な郷名であったかどうかはともかくとして、三輪の地は「大神」と呼ばれてきたようです。ところがその後の史料上では、大神なり三輪という地名は、豊臣秀吉の頃までは、はっきりとは登場してきません。その代わりに、おそらくもう少し広い範囲を含んだことと思われませんが、三輪周辺は「松山」という地名で史料上にあらわれます。現在ではこの松山は川除の小字として残されていますが、平安時代から鎌倉時代にかけての史料で、三輪神社を松山の社と表現しているものがありますので、三輪が松山の一部であったことは確実です。

その後は、中世を通じて松山（荘）という地名が使われます。その一方で三輪（村）の名称がはっきりと史料上で確認できるのは、十六世紀後半の豊臣政権の頃まで下ってしまいます。しかしながら後述するように鎌倉時代の終わり頃の古文書

には松山莊桑原村という地名がみえるので、おそらくは三輪村の場合も同様に、松山莊の一村落として遅くとも中世の初期には存在していたものと思われる。

史料の上では確認できませんが、おそらく中世を通じて「三輪」は、松山（莊）内の村落の名称として用いられていたものと思われます。それが豊臣政権の成立によって、「松山（莊）」という枠組みから自立した、行政上の正式な村落としての三輪村として、位置付けられることになったものとみられます。

### 3 三輪神社の創建

松山彈正を 三輪神社の創建については、南北朝時代（一二三三～一二九二）にこの地に勢力を振るった、松山彈正だんじょうという人めぐる伝承 物が深く関わっていたとする伝承があります。

言い伝えによると、この松山彈正という人物はもと大和国の出身であり、その人が文和年間（一二三二～一二五五年）に故郷の大神神社をこの地に勧請かんじょうしたのが、三輪神社のはじまりだといえます。一方、別の伝承では松山彈正が在地の悪党である大道おおどうじんごろう甚五郎と合戦を行うために、茶臼山城ちやうすやまという山城を築いた際に、そこにあつた三輪明神を丸山の地に遷うつしたのが、現在の三輪神社のはじまりであるとしています。なおこの伝承においてもその出来事は文和年間のこととされています。

以上の様に伝承の上においては、現在の三輪神社のはじまりは南北朝時代の文和年間のこととして伝えられています。

#### 古代・中世の史料

先に見た通り平安時代の史料によれば既に奈良時代の後半には、この地に大和の大神神社の封戸が設置されたことになっています。そこにみえる天平神護元年という年号については、慎重に検討してみる必要があるようにも思いますが、「和名類聚抄」にみえる有馬郡大神の地名の存在から考えると、遅くとも平安時代の半ば頃には、この地と大和の大神神社との間に、一定のつながりが成立していたことは確かだと思われる。

ところで、有馬温泉に鎮座する温泉神社の神様は、当地の三輪神社の別れであるという言い伝えが古くからあります。こ

の温泉神社は古くは湯泉社とも呼ばれ、平安時代の段階では、大社として国家的な祭祀さいしの対象となる由緒ある神社(式内社)でした。その神社の由緒を記した平安鎌倉時代初頭に書かれたと考えられる「温泉山住僧葉能記」という文献には、湯泉神社の本社は松山の社(三輪神社)であり、さらにその松山の神様は、古い時代に大和から遷されてきた神様であると記されているのです。

とすれば、平安鎌倉時代からみて「古い時代」に大和大神神社の封戸が松山の地に設置され、それとほぼ時を同じくして社も建立された可能性は高いと思われます。どうやら三輪神社の創建は、伝承によるよりもかなり古い、平安時代中頃以前のことに考えることができるようです。

神々の交　ところで「温泉山住僧葉能記」には、松山の神様が有馬に遷うつるにあたっての経緯が詳しく述べられています。流から　その概要は、おおよそ次のようなものです。

その昔、大和の人が松山に移ってきて故郷の大神神社をお祀まつりしていました。この神様は男女二体の神様でしたが、このうち男神様はやがて、近くの香下の女神様と懇ろとなり、頻繁に行き来する仲となってしまうました。怒った松山の女神様はある日、松山の社を飛び出して有馬方面へと放浪されましたが、そこで奈良時代の高僧である行基菩薩ぎょうきぼさつに引き留められて、温泉を護る神様として湯泉神社に祀まつられることになったというのです。

これは様々な意味において示唆に富む話ですが、三輪神社との関係から言えば、それが大和から来た人々によって大神神社から分祀された社であるとされている点。そして三輪神社から容易に行き来できる場所に、香下の女神様がいらした点などが特に注目されます。前者については先に触れましたが、後者の点については当時の松山の社の位置について興味深い情報を与えてくれます。すなわちこのことから、松山の社は香下方面へ簡単に行き来できる位置に所在していたことが推測できるのです。

ここで参考になるのが、三輪神社横の上野を経て志手原および香下方面へと続く旧道が、現在に至るまで「おおどうさか大道坂」と呼ばれていることです。この「大道」という名称は一般的に歴史の古い幹線道路を指すことの多い言葉です。ですから松山の

男神が香下の女神の許へと頻りに通ったのは、この「大道坂」であつた可能性が十分考えられます。これらの点からみて松山の社すなわち三輪神社は、伝承の生まれた当時から、大道坂に接する現在の位置にあつたと考えられます。

※現在は一般に「だいどうさか」と呼びますが、江戸時代の絵図には「わうどうさか」とあります。

**三輪神社** 以上のことから、松山彈正をめぐる著名な伝承にもかかわらず、史料の上からは三輪神社の創建は、おそらくの創建 古代までさかのぼることができるよう思われます。

また同じく伝承においては、三輪神社はもともと茶臼山（現在の城山公園付近）、または天神山（杉ヶ丘付近）に鎮座されてきたのが、松山彈正によつて現在の地に遷されたのだとも伝えられています。しかしながら、三輪と香下との間の神々の交流の道筋からすると、おそらく当初から大道坂横の現在の位置、すなわち丸山に、三輪神社は祀られていたと考えるのが自然ではないでしょうか。

#### 4 松山荘と松山氏

**松山荘の変** 平安時代の後半から以降、全国のおよそ価値の認められる土地はすべて、国政機構そのものを含めた機関や遷と領主 家によつて占有されてきました。これが荘園です。これはもちろん当地においても例外ではなく、三輪およびその周辺は松山荘と呼ばれていました。

松山荘の名称がみえる最も初期の史料は、平安時代末期、武士の台頭を招く契機となつた「保元の乱」の一方の当事者として著名な、藤原頼長の記した日記である「台記」です。「台記」の仁平三年（一一五三）八月八日の条には、藤原氏にとっての一大行事である春日神社参拝の際に、食事を調達する役割を担つた荘園の一つとして松山荘の名がみえます。この史料からは、荘園としての松山荘は遅くとも十二世紀には成立しており、当時の領主は藤原摂関家であつたことがわかります。

ところで鎌倉時代以降、藤原摂関家は近衛家や九条家をはじめとする五つの家に分立をして行きます。その過程で松山荘は、九条家を経てさらに一条家に伝えられたようです。しかし十三世紀の後半頃に一条家に伝えられた後の、松山荘についての史料は、ほとんど見いだすことができていません。ただわずかに約二百年後の十五世紀後半に、奈良興福寺で作成された記録の中に、「いくら催促をしても年貢が送られてこない有名無実の荘園」として松山荘の名がみえます。

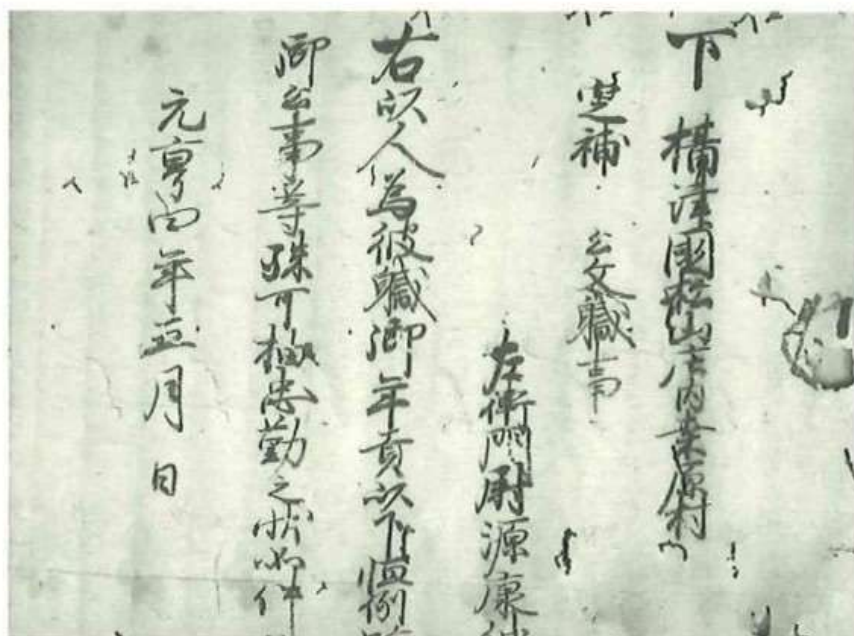
興福寺は藤原氏の氏寺です。どうやら松山荘はいつかの時点で摂関家から興福寺へと寄進されていたようです。ただ荘園に関する権利というものは複雑に分割されている場合が多いので、この場合も藤原氏が松山荘に対してまったく関与しなくなっていたのかどうかは、はっきりとしません。しかしいずれにしても、荘園としての松山荘の歴史は、遅くとも十五世紀の段階には実質的に幕を閉じていたようです。

#### 松山荘桑原村

これまで紹介してきたのは、中央に連なる貴族達の残した記録からみた松山荘の変遷でしたが、地元にも公文職源康仲 中世松山荘に関する貴重な史料が伝えられています。それは桑原の松山家に伝わる「松山荘桑原村公文職補任状」と名付けられた古文書（市指定文化財）です。

この文書は鎌倉時代末期の元亨四年（一三二四）に、左衛門尉源康仲（まこと）宛てて出されたものです。発給者は文書の冒頭に花押（サイン）を据えています。氏名を書いていませんので、今のところ誰なのかかわかっていません。しかし氏名も名乗らずに、花押だけを文書の冒頭に据えるというのは極めて尊大な書き方であり、発給者はかなり地位の高い人物であったと予想されます。

文書の内容は「左衛門尉源康仲を摂津国松山荘桑原村の公文職に任命する」というものです。公文職というのは領主の命を受けて、年貢や公事の徴収をはじめとする荘園現地の管理に携わる役人のことです。通常、荘園の公文職はその職務の性格上、荘園の土地や現地の人心を掌握する必要があり、従ってその職にはそのような器量を備えた、土豪的な人物が任命される場合が少なくありません。それではいったい、松山荘桑原村において公文に任命された左衛門尉源康仲とは、どのような人物だったのでしょうか。



公文職補任状

土豪松山氏

左衛門尉源康仲の出自を知る上で、貴重な手がかりが「太平記」にあります。

「太平記」巻第三六の康安元年（一一三六一）十一月頃の記事には「撰津国源氏松山氏は香下城をこしらえて、南方に牒ちやうし合わせ、播磨路を差し塞ふさいで人を通さず」というくだりがあります。当時の土豪は伝統的な姓（この場合は源氏）のほかにも、自らの出身地や、地盤などにちなんだ独自の名字（この場合は松山氏）を名乗る場合が少なくありませんでした。つまりこの記事からは、南朝方について香下城に依よって奮戦した松山氏の本姓が、源氏であったことがわかるのです。

一方、建武三年（一一三三六）七月付の「森本為時軍忠状」という古文書（森本家文書）には、やはり南朝方に立って奮戦した森本為時の味方として、松山宮内左衛門尉という人物が登場します。ところでこの場合の「左衛門尉」のような官職名は、一族内で代々引き継がれることが少なくありません。したがってこの文書からは、松山氏が左衛門尉という

官職名を帯していたことがわかります。しかもこの文書の主人公である森本氏は北摂方面に拠点をもつ撰津源氏の一族です。したがってその味方である松山宮内左衛門尉もまた、その一統に連なる可能性が考えられます。このような推測が成り立つならば、この文書に見える松山氏は北摂源氏の一統で、しかも左衛門尉を帯していた人物ということになります。ここでもやはり源氏と松山氏、さらには左衛門尉という官職名とが相互に結びつく可能性があるわけです。

以上の史料の事例、そして何よりも文書を伝えられた家が松山姓であることから見て、松山庄桑原村の公文に任命された左衛門尉源康仲の名字は、松山氏に間違いのないと思われれます。そして名字の「松山」は荘園の名称そのものにほかなりませ

ん。ですから松山氏はよほど松山荘と関わりが深く、そして荘内に深く根を張った土豪ではなかったかと推測されるのです。

### 松山氏と三輪

先に見た通り三輪神社の創建に関する伝承では、この松山氏が深く関わっていたことになっています。しかしながら三輪と松山氏との関係を具体的に物語る史料は、これ以外には残されてはいません。しかし一方では川除には松山氏に関わる伝承がいくつか伝えられていますし、桑原と松山氏との関係についても先に見た通りです。こうして見てくると具体的な材料こそ乏しいものの、松山氏との関わりが明らかである川除と桑原とに挟まれた三輪にも、その勢力は及んでいたと考えるのが自然ではないでしょうか。しかも三輪神社横の大道坂は先にも触れたとおり、三田盆地と香下とを結ぶ古代以来の要路でした。南北朝時代の政治動向の中で、中央からも注目された勢力である松山氏が、要衝である三輪の地の掌握に腐心したのであることは想像に難くありません。松山弾正と三輪神社をめぐる伝承の成立には、そのような南北朝期の政治的動向が背景としてあったのではないのでしょうか。

### 中世から

これまで見てきた通り、平安時代末期から南北朝時代頃までの三輪については、松山荘とそれを名字の地とする土豪松山氏の活躍に関わる伝承や史料が、豊富とは言えないまでもいくつか伝えられています。

### 近世へ

一方でその後の中世の三輪を物語る史料は、ほとんど見いだすことができていません。ただ松山氏に関しては室町時代においても、三田盆地の代表的な土豪の一つとして位置付けられていたようです（「臥雲日軒録」）。また十四世紀後半の応安年間には松山藪四郎という人物が、車瀬彦太郎という人物とともに、祇園感神院（現在の京都八坂神社）領の「金心寺田畠」を侵害していたことが、八坂神社に伝わる古文書にみえます。どうやら松山氏は室町時代、少なくとも十五世紀頃までは依然として近辺に勢力を振るっていたようです。

ところで八坂神社文書にその名がみえる車瀬氏は、後に豊臣政権のもとで三田を支配する山崎氏の家老として伝えられる車瀬政右衛門と同姓です。山崎氏は本来近江の出身で、天正十年（一五八二）に功により三田を与えられて入部してきた大名です。おそらくは外部勢力である山崎氏は、入部するにあたって在地の土豪的勢力の家臣への編成をおこなったものと思われます。そのなかで車瀬氏は事実上、筆頭の地位を与えられていたこととなります。どうやら山崎氏が三田に来た時点で

は、盆地を代表する政治的勢力は車瀬氏に移っていたようです。中世から近世への移行期において、三輪周辺では政治勢力の交代が行われたのではないのでしょうか。

### 車瀬氏

車瀬とは現在の橋の位置からもわかるとおり、三輪と三田とを結ぶ渡河点にあたります。つまり交通の要衝であります。しかも慶長十年（一六〇五）に作成された摂津国絵図では、武庫川をはさんで兩岸に町場が形成されている様子がうかがわれます。中世の終わり頃の車瀬の地は、おそらく単に交通のみならず、流通・経済面においても要衝として繁栄しつつあったものと思われれます。

そして車瀬氏はそのような都市的な町場である車瀬付近を拠点として、三田盆地を行き交う流通・経済を掌握した、新しいタイプの土豪として急成長してきたのではないのでしょうか。その意味において、主として農村を基盤とした松山荘を名地の地として勢力を振るった松山氏から、都市的な町を名字の地とした車瀬氏への勢力の交代は、まさに時代の変遷を反映した出来事であったともいえます。